

投句欄 自由律の泉 ⑪

- |    |  |         |
|----|--|---------|
| 1  | 遠い日常減らない口紅                               | 井尾 良子   |
| 2  | 咳をしたらジロリ                                 | 岩崎 直樹   |
| 3  | 形相に蠅が震える                                 | 檜 幽可    |
| 4  | 土を掘ろう花を植えよう未来を信じよう                       | 久光 良一   |
| 5  | レンゲ草 旧跡の雨にまよう                            | アカホリ フキ |
| 6  | 真冬の陽の光は母なる愛                              | 大岳 次郎   |
| 7  | 土筆つんつん津波が来た空き地                           | 金澤 ひろあき |
| 8  | 陶土 <small>つち</small> に指跡が生きている 十年        | 白松 いちろう |
| 9  | 草の枝垂れて墓らしい墓だ                             | 柳 泉洞    |
| 10 | 病み臥す臉裏に広がる内海の蒼さ                          | 小山 榮康   |
| 11 | いらいらと土筆を探す                               | 無 一     |
| 12 | 西日窓さがしものが見つかからない                         | 原 さつき   |
| 13 | エイプリルフル <small>ワルツ</small> 円舞曲のリズムで散るさくら | 和寄 はると  |
| 14 | 潮風に誘 <small>おび</small> かれて出刃を研ぐ          | 植田 博    |
| 15 | 春風に花の会話がながれている                           | ちば つゆこ  |
| 16 | シャボン玉ひとつふたつと嘘がとぶ                         | 中島 雲舟   |
| 17 | おじさんの籠にテレビで見たスイーツ                        | 明日原 夏斗  |
| 18 | 春の雨行きずりのカップヌードル                          | 野谷 真治   |
| 19 | 我慢する奥歯がインプラント                            | 富永 鳩山   |
| 20 | 服一枚脱いでさあ明日からのこと                          | 黒瀬 文子   |
| 21 | チンドン屋さんのクラリネットが春を呼ぶ                      | 平岡 久美子  |

22 こらえている空の下を急ぐ 富永 順子

23 視線の甘すっぱさ 遠い日の心拍 部屋 慈音

24 君の落とした小石が波立たせるぼくの水面 田辺 まさゆき

25 強い雨急ぎ車に食 積ます 田中 美太

26 刈った薄荷の香りとカッコウ 大迫 秀雪

27 米粒にのこる田植えの腰の角度 室伏 満晴

28 ふいと煙となりたく項垂れた月蝕の終 江藤 霧鳴

29 軍部と東條に回せしツケは未済 行方ほいさつき

## ● 泉⑩より 一句鑑賞

読経の中鱗が剥がれてゆく 原さつき

▼私のところのお寺の和尚さんは、読経の際に一緒にお経をあげて下さいと言われて経本を渡して下さいます。そこで私も意味が解らぬまま唱えています。確かにお経を唱えていると心が洗われるような気がしてきます。(久光 良一)

▼鱗 は鎧であろうか、剥がれる は許しであろうか、読経の中を通り過ぎてゆく過去の人への想いが厳かに表されている。

(部屋 慈音)  
▼この鱗は「怒り」「わだかまり」「行き違い」「偽り」……etc  
様々な凝り固まった負の感情。それらが、読経によりポロポロと剥がれてゆく心地よさ。深い物語が見える。(大迫 秀雪)

ビール注ぐ 無 大岳 次郎

▼さて、と言って傾けたは良いがすっかり飲み終えたか、それとも無心に手が伸びてこの一杯と向き合っているか。すっかり出来上がって自意識がどこかへ行ったのかもしれない。注がれるビールを目でポーツと追う。(柳泉 洞)

▼無意識的に、唯々疲弊した心の赴くままにビールの蓋を開けてしまっていた。―その様な光景が浮かぶと共に「無」のたった一言が胸の内へ刺さる感覚を憶えた。孤独や哀愁の空気だけでは言い表せない美感が短文の中に深く漂っている。(江藤 霧鳴)

風につまづく 消えてしまったゆびきり 井尾 良子

▼ゆびきりは、消えてしまうものだろうか。消えてしまうことが、象徴的。「風につまづく」が、いい。  
(野谷 真治)

初雪が睫毛につもった

和寄 はると

▼雪がふっている中、まぶたにひんやりと雪がかかり、作者が感覚的に寒さを感じている様子と雪の日の雰囲気がよく伝わりました。又、言外に深さを感じました。  
(アカホリ ユキ)

親子のキャッチボール普通の日々をとりもどす

金澤 ひろあき

▼コロナ禍は、子供からお年寄りまですべての人々から日常を奪ってしまった。一年以上過ぎた今も首都圏や関西方面では深刻な変異株の広がりがあるが、一方では日常をとりもどしつつある。お父さんと外でキャッチボールを楽しむ少年の顔が浮かんでくる。  
(ちば つゆこ)

雑用の雑に名前つけて肯定したい日

富永 順子

▼雑草、雑念、雑務…。雑の付く言葉は多々ありますが、一括りにして「雑」に扱うのも気が引けるときがあるものです。有益なものが混じっていることも、十分にあるのですから。  
(明日原 夏斗)

▼人にとって雑用は必要不可欠のこと。特に主婦業の方は名前の付けられない雑用が湧くほどに有っても、素知らぬ顔で日々過ごしている姿に全く頭が下がります。ご安心ください、年を重ねるごとに黙して感謝しています。  
(白松 いちろう)

ものがたりゆっくりとじて 春の服 中島 雲舟

▼コロナ禍にあつて不自由な一年以上、ゆっくり閉じるからには名残惜しい物語なのか？そして次のステージへ、春はパステルカラーの服で行きたいもの。  
(原 さつき)

▼衣替えにより、これまでの季節の役割を終えた服をクローゼットにしまう。そのときにふと、その服を着て過ごした様々な記憶が物語として甦ってきます。また「春の服」であることに寂しさと温かさがより一層増して感じられます。  
(室伏 充)

窓ほそく開けて冬のほそい風

佐川 智英実

▼冬であっても換気は必要です。その時の心中が「窓ほそく開けて」にあらわれているな、と。  
(無 一)

涙の量だけいつも心が軽くなる

明日原 夏斗

▼この方の性別は？氏名は何と読むのでしょうか。その通りのことをその通りのままに詠んでいます。僕は涙を出すのが恥ずかしいです。悲しい時はしつかり泣くのがいいですが。さてもれし涙はどんなものでしょう。  
(大岳 次郎)

今が仮の世ではないかと思ふ冬夜 久光 良一

▼今は、全く思うことも無くなりましたが、中学生の頃から、二十代までだったか、初めは夢と現実の判断に苦しんで、次は、現身とあの世が入れ替わっているのではという疑問に、苛まれることも多々在りました。只それは、「死」を理解したことで卒業出来ました。  
(檜 幽可)

バンクシーもクシャミ ワクチンが間に合わない

白松 いちろう

▼正体が謎の画家バンクシー。ストリートアートで現代批判を発信している。ふざけているように書いてまじめだ。コロナに翻弄される今、そのバンクシーもクシャミしているという構図に、批判の目を感じる。

(金澤ひろあき)

全部紙クズだった抽選券

無 一

▼この経験は、誰もが、もっていると思います。残念だったと思う反面、怒りも込み上げてきます。共感できる、好きな句です。

(田中 美太)

空箱重ねて入れるものがない

平岡 久美子

▼とても身につまされる思いで句を見詰めました。(小山 榮康)  
▼何か入れたいと思って空き箱を重ねてみたが、さてさて何を入れたらいいのか私にも経験があります。でも、入れなくても見ているだけで想像力が沸き上がりそれもまた楽しいことかもしれません、日常の何気ない所作から生まれた素敵な句です。

(中島 雲舟)

▼死んだ後家族に迷惑をかけないようにと身の回りの物を整理しているが思うようにはいかない、去年の思い出の分は何もなく空箱のまま、今年もまた何を入れるものがなく空箱が一つ増えるだけなのか さみしいですネ。

(井尾 良子)

さまざまな顔して雲が泣きだす

富永 鳩山

▼かつて、同じ窓辺から雲をカメラに撮った事がありました。不

思議と同じ雲の型にであったことがなく、季節によっては雲の高さ、空の色によっても趣が違っていたことを思い出させてくれた句です。

(和寄 はると)

一日誰も来ない枯野行く救急車のサイレン 小山 榮康

▼「一日物云はず蝶の影さす」放哉 を喚起する句かと。視覚と聴覚。「本歌取り」の手法を俳句に適用すると往々にして川柳化しがちなところ、この句はどっしり俳句にとどまって揺ぎない風格を保っているとお見受けしました。

(行方 はいさつき)

今朝も黄身から崩すいつもの死亡記事 さいとう こう

▼朝刊を広げるとつい目が死亡記事に行ってしまう、そしてその方の一生をたどってしまう。朝食についた卵の黄身から崩すのもいつもの仕草、同じようにやっているけどまるで違うことをうまく句にまとめてある。

(平岡 久美子)

●係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

へ送り先へ 〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

へ締め切りへ 2021年9月30日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会の公式ツイッターで紹介させていただきます。紹介を希望されない方は、投句の際にその旨お知らせください。